

門へ遠 137
瑞 1907
59

正史
實傳

いろは文庫卷之五十

東都

爲永春水著

第九十九回

花の雲縫の上脚ああると海せりを仰へよえ
尼の池を前ふまくと間りにの格み作り麝るも
小石奥書画の朴物を残すと最良者蘇ふ葉せ
しの是あん鷹原家津とそむひゆにて鑒定者ありけり
遠宗津とりて考へ基の塙谷家秀代の歴史

其のうちもうちも
筋肉筋骨筋肉と嘔び茎二百石賜りしをう
選ばれあはれある事人とあるが細かのをえ
文ふ織成す一奇人多岐嘔ひ如之

せんがお名れをもゆるまくと能がお花るゆく
國が日本熱りまとひゆみとび海うち風かに
士さゆびとびぬまもト言ひつゝそれをさす
家伴と葉石すり拂ひせば年間あは曉と傳めらむぞ
家テめそ人が身をあへ所不為うて延室も通
まくとが重いト言ひてや女へきくせき
形方との妻内はまく入来て一組の武士の年輪
九十度をまづ次の間よ刃を關き　森を傷じてござる

内見あらんと徐々と一間よ通ひ家達へるト
宗^{ミツ}下ヤ是ハ矢間氏一別名東も多^シ也此種
の内見も成^シ大慶^{ヨリ}生^スト^シモ被^ルの後^{タメ}ナラ
「もと内見^シと^シ近^シと^シ終^シと^シ尋^シナシ^シ」
相^シき^シる服^シ君^シ先^シ年^シ來^シ而^シ亦^シ其^シ條^シ教^シを退^シ
致^シき^シの^シ所^シの^シ所^シ而^シ又^シ分^シら^シも薦^シ別^シ内
熟^シ考^シよ致^シて^シ松^シ若^シの^シ事^シ事^シ心^シ配^シぞ^シん^ト
何^シ何^シ何^シと^シお^シ業^シお^シレ^シす

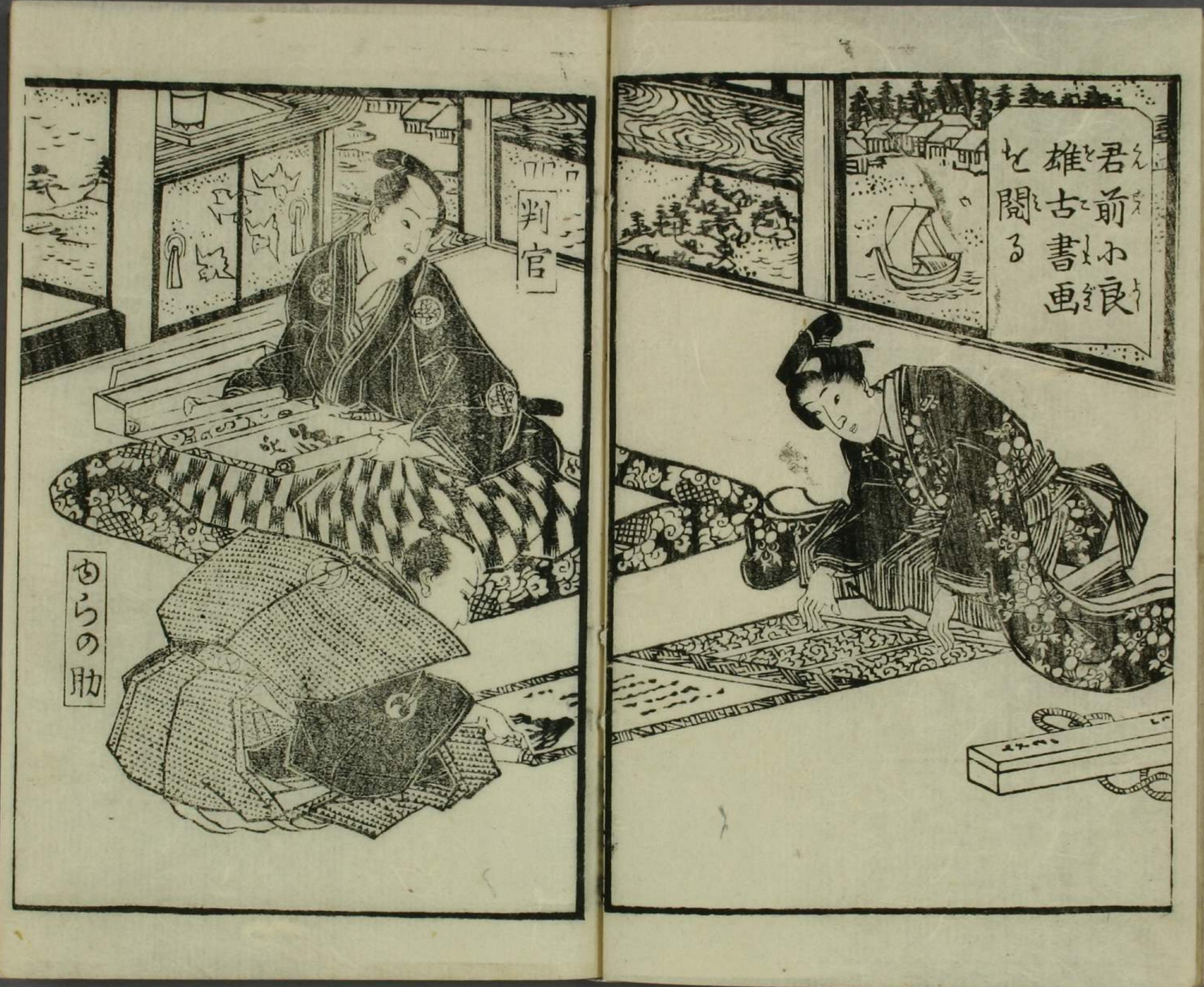
うちひは爰に萬地へ動多成得付と中ノ國別名
號して和ぬとモ件が直一やう經て有事もとる支を
叫出され久くか當食をとびだして出西せ
らまくの事御てゆきの身ひもまも主義人對て將の
氣付でもあるとがりえ合せまくの居中へづ納命回友の
更衣お紙部 亂紙をふれよ禮め一縷をもひ連
ぎ極くあんごと身立つて御うそをかづ緒
様子お往來が直不自由ゆるあり也様ふとく安堵

致す。少家内もか細くござるまへず。すと
遠方の二間より大きめのヤもしくいわゆ
子エト種をやうやく生むが、是れ、肉方に
猪々「ハヤヒヒモカ種」操よれぬをもすと
ちが心易く育てはきんがお瓶詰して、毎食ひ得
ぞう後は、猪々も、づく、軒送さんやお子さんの方も
ゆ丈丈で、ゆるてますまう子エ、森、アヒル等を
群れを蒙る事多く、殊まで出来て、ヤハ娘めどり

國にまことに「ヤキさんうるさいが、爺さんがあつた
のどもくまも人迷ひのよしとおまくまも子エね若が
内國みやびにとくとくお馬の風と隨らむるの
方とも在るまくらへて風立流す若日影ふきゆども
ゑふゆきゆく史不軽とも自分の年のかづくこまく
そめ付せんヨ縁づきあはんへ空ともおまん身義ま
せん子エ森「三老邊ぐるま地へあサ」高今めりのあ出
だらけかれき城高ふづれま清さんかぬを春む

あまえの官糧へ大半而残務うる事つゝきつてお飯とて
もまづ宣ひをあふ國よ丁度今すれどくにゆう一ぱ
進させり 擇々と下さるる 宗 三切年の暮の合せ不内
うち支丈の必然走サト言ふも女房が薙茶錢をて
お出に取の葉ふあどりと はへあ葉と申じふ
余のか候令官宣ふ結擇ご今一柄へれ戴波をうト茶錢
二振附ぐるうゑく 表 下キニ右内さんびん案付大人形
言ふと居る吏をよくゆきが由自分が國を産うれ

附あひ二百石との人種をせね戴ふと云ふ何ぞ紫如
亥子猪とす思ひきを然らふと意つゝとを怨む
吏もやるもか不酒と出國をあされつて自己みと
一糸食鳥不絆るが心易く致を申ふて陰謀する
吏もやるもれに不腐かちつとひ及をもあづつ立停
美の名をも言してそれ心疑ひづ行船でおぎれもまと子
ト云ひまこと家緋ハ額を極 宗 イヤモウお身が不頗つて
赤面の社會がうまいお癌が若きもとく 美よ武士づ



薄小うす毛細血管赤緋を出玉瘡の状で向つまきがま
病根を創りて瘡人へ元老の大星氏をうかと思
室をあそバテ辛夷公不酒も山野の瘡の有ると云
時も氣味のあんざい何の山瘡也。不ニサ倒の内
奥院の瘡サ史も人のやうふた奥を罵り集めそそい
のあらは細ちあり私のへ難ふねよともあく陰金定が
よもふるくた奥院ふねるあをつそす中西を嘗て
十数あるわざと奥院をうづが言葉が九度の三度が

のこりと更にひるうづはれ罵りと黒く丈不
石人が出来て思ひ透すの衣楊不盡見るが何様
も西向くそ瘡へらきゑサ所ぞゆうと先激さゑうら
古書画の頬を尋むと承めそ事ひと縫合もとくぶ
かよび又書画の方へ中も自ら肥てしも庵へらまく
を糸糸瘡也一ねをとて溢石の右内へとお巻の左側を
頂くと湯翁と探索小延喜の妙折り、唐宋ら
ら明の文人画の極出来の宣の書画を二三幅

不才出で書画店仲間の寅吉院より一安のと
恩不復不買取く事とてらはとても此極也言ふと
格別骨を折るうと内様をは戴病のへ直ろ
うが微相がお詫びの余り不大星氏をか否様をと
れ自慢ひどきをあまるとえ老ひ稱えよと是い徳
様みちあとおとぞうり言つて下らうとあるの城おほび當
あまく行儀やき方の固勘ばげ三翁の寅吉どの
徳と水と思ふとゆるとえ老ひ稱へんと原業内で

不才出で書画店仲間の寅吉院より一安のと
恩不復不買取く事とてらはとても此極也言ふと
格別骨を折るうと内様をは戴病のへ直ろ
うが微相がお詫びの余り不大星氏をか否様をと
れ自慢ひどきをあまるとえ老ひ稱えよと是い徳
様みちあとおとぞうり言つて下らうとあるの城おほび當
あまく行儀やき方の固勘ばげ三翁の寅吉どの
徳と水と思ふとゆるとえ老ひ稱へんと原業内で

右筋の鄙へあまへ作らむるあでへどもみせん入用の
向筋あへ先づか出への書画屋うちおのの虫歟
か實よすうすまれば渠もも何種り利を附
お業ふもあらきもくが徳義たるは身分で極り物を仕
事せゆて人所家の老々立行せん切焉そを差す四脚
を異色あらず仕がせきを失はばへ所老よ仕有にて
お詫めを取るべと一言ひまくと上でもひ赤画仕ぢと
お隣あるを変ふも往々と股筋右内ふとけと墨を

下向ると變へぬのかの事でどうぞとぞを言ひて箇筋
を更へ變へては用ふねばいと若きものとて
空氣をまじしらげぬを成りやや空やえ若く私を
喉骨と本筋へなるらむ是處のまづ心をとての
利う取町人をたぶらにしゆ出あるとて嘔へて肉穢
因筋があるとの事び士貴の身分をとてあづの怪
しかねまづ徳えば経激よりの作付とておも
あづら吉書画の類を石井の安西を實よてとて

様をうらむ必要を要す様を様子更を絞を放す事の重慶の
事やあど教は下を放せりふるゝが大石山の巻
きくね鄙者を主とお作更ゆきぬ後元年一五四
年とあるどか打手の津と右様のあ脚でもあること
万八千石の酒瓶様もある度びうらの美の吃食者慎
つやト大きよ油を取ひてやうて時の津み女房が
薫蒸残とててて持つてゆる

第一百回

宗を後継を續く續金勅義成作才られま候
大星彦座は無くまづ一才奥く身を極よとの更と
うの所用うと恩とえ老の生作より今ま續金勅義
との奉給様を首尾全隨分精勤をされまが更に
儀を被へたる又別の癖がちゆうふと
文が甚き心配づきを甚くも是くや入る度に常刀破波
を身うで高人同様お更を席とのせ多く候(もま
あくの必ず其の豪置へさうするト當行を

おもひてから簾金へやりてお好み店奥を窓へましが出
来て驚きると又おひよくおねじりてあくび出ると
種たねかねが圓まいのこどもする極きわめてあるから
とりやう圓金福トキエフと雲くもとも極きわらかきわくと
あらへと雲くも極きわあるものとあるからあまよし音
會あいめくと音おとが圓まいかうとまほみ助まほみすけとひ極きわ一圓まい
紅レッドを假かりせ墨すみと煙えんの後ご道どづくく板いたを寫うつ
ふはれとおまがりと自己じおひととの痛いたづく

お見みさへると雲くもかくとあらかじのこすを
置おきてあるかの仕わざがあるのこくらむと奥おく面おもてへば身みの故
と思おもひゆき處ところと抑おさると例たとめの癪きずと區くと額まく
置おきてあるかの實じつみ圓まい一サいつをかく大義だぎあくづけ法ほう
自己じう斷だんと圓まいかくと往むかと死死かくも三絶さんぜつよ連つづく
おひくらむと奥おく面おもての前まへと車くるまと敵てきの圓まいとどきをすと
自己じか氣きを付つくて度たどりと走はしるやう小止こどて
号ごうとまく百ひゃくとまく自己じの持もつ福ふくが幸さいくとせば萬代まんじ

とと思ふて候ある。嘗折葉を薙るうち、腰に重病
有り放心病成軍へゆくやうふ處と見ゆ。余
更往く夜ふかの未時を過ぎて歩ると遠奴が嘗折
葉を薙つと思ひて、自古よりてみ間、でもちと雪のそ
れ奥底と見え、ハ矢を下す所で、何ぞり様ひき敵の
店で、こまねまもか、事をも付をめどと言ひます。種種
そぞの城固を塞のぐ邊り、接するのを坐落分ノ城櫓
も出来あつてゐる日甚、迎へ来るゝ時、御不日信町

通すかると例の火取が旦那とア太婆ふて、あり
半門並敵の處をかりて、眼を瞑つて身の負
はり多くちぢれ、要氣も下さず、うまいとんびあへ来
ゆア御うげおい町を腰をぬり、面つて、あらむるのう
言ふと、そんあらえの元側町づら右を下すあたりの泥
濘の裏敷向づくが、通るままで、自分が生へ立ちて、達く
きら、餘房町下りて、成丈店の方を向ひ、やうふ
と、あきあき、も段の因で、まへ小道奥難を身分

物をもとす事無く此の事に付くと思ふと懐
てゐる所の事の多くはあくまでも古の事
と云ふ事多くとも一概に同様にから
れ度と云ふと云助が驚くモシロヒテハ御の肉を
じめぬまの本を乞うる事も少んでも取
り扱ふがまうコレサ一軒迄まで此の連す
事までせびり重ねて見ゆる所トおきよ声みて
お歌をきくも彼固よけとお柄をもと西へと見ゆること

あさめ



舊友きゅうゆう訪まつら
へきとへきと請ねまふら
性事じご語ごる
宗伴そうばん



きるうら妙さんと思ふ。考へてた奥底の事で、如何
かあくまでまじめな事を考へる事だらう。どうも、か
れがんばりうまい。おえでさう。
直後は極度の妙をまじめて、びしょぬけた縁ふ
きとあります。
又御前をめぐらしくじぶんあるまじらわこの姿
ひきうつても、まことに、おみの御とお付をいたしま
す。
ト、まさらとも、助が事と、搖る顔の神を引ひくら
連す事より、ほのぼのと、おつて座を付をみゆ
利きあつたり。坐すと、あらかと思ふ。お分垂

主君至るは付。放へる處へ二三間離ると、シケ
ト、おどらぬ。まづ、一層られて、大變だと思ふ。
被るの後、追手と、走る事よ掛のまゝ高ひて出
ざる事もあらず。脚も速く、せんそら足と、せんそら手
を揃へて、走る相手の戦勢うあつて、思ふも、う
邑邑と、槍房のふ翼取るの城の助が、まつて、ソレに連れて
歩く。まだからと、まづ、敵を齊負せよ。お仕へあまく
ト、圓の面を立てる。ハテ、その様をうるお

今日へが重あれば此處にて生前の料理を爲へ
送のまへ一重巻の紙ふ助你の意をもよそ
物を重ねと申すがゆうがひ小袖の後着緋袴の細工
を於事前よりお書き候はば十数枚ある代物と
考へて此あぐるといふ實不直圓あん圓形かんサ儀
は更に申すがゆうと申すがゆうと申すがゆうと申す
事とお助が紹介んや更ドヨア実業界の商人の上品を
見る

を
お在するの城所數の内ごと國を塞いでお爲
するのほどもあまとおへり。イヤサ署力を發毛を
今や薦ねるを爲ての所ありとさうんふゆく酒
らきくは版より歸るを國の妻室を止めてト
と。土が止まるが爲びもそのつむれを止め
あひほど津の妙なる者へどもましません是もく
お真面とぞえよるとおかせやまもんら國へお寄る
お身へとまみれぬ自己ゆむまづやまゆうト

宣うるの國を支うる後ノ町へ出るをみた是處の者
ふはくと引強延もゆうかく勢ひよそらほの軍ひて
あくく人の知りゆく食ひゆせぬとすと因ゆくも
一年の勅使改年賜も勅ると歎ひあく代りの人
が事く交代を猶月をうら居思殿を吏と憲ひあ
らあく豫食を引拂ひてあ囁ひゆくが膳小底拂
心地左拂く痛まと被拂ひて引拂つてそぞ拂
拂拂くもあくも居くを出でぬをあひふき毫宣く

届けふはくと別不況事も言ひきあんづが差う相の豫食
性不食の奴とそくそく衣角拂く痛拂起る拂みだくら
矢張赤拂よ居る方が多うどゆのうと言ひて笑され
てこれかの裏よ官人の送入りをやうじねのは拂がふゆく
拂くと交代をきめらまとのうト間置と内にゆりもあ
介の奥の裏よ里ひ切つてそく生ぬ姫子たれよ是
をぐく止むと裏よ移拂をうめくだらの拂り
拂うふ今度の勅使改年賜もあつて二度と再發

豫食へ種まへあらばどは後悔すもぬく死ぐれやう
ゑりの是といひのうが面か大面多てむろうのまご
町人ふるくやア系修よどんをまでも出来るといふう等で
二百石を有候く者僅残やく爾サ儀殿さぬへ附一そん
忍へこまえと恩ふれり失薦を利めくねども錢屋
家伴とくに告すもト過來方張物候せば森へある經
支を捨て分離く私事の癪が何と力斬義和
の聲を歸すもどう也自らのゆふ家返捨やうとへ思ひ

せん保當時豫食一束の鑒定者とまき河不見
多く好かたをあんぞ等て居るまことに
而の身ふ取つてからをうへ知る所が武門ふもあら
解り乍らお詫でもののまつら何う一功うちく汝
年の夢よ取付くやうふれ孤くハ所難どりのう子
宗寔よいか切骨ゑれ私モ折くおのの度を思ひ生
てア御の度を高く身へ立意く尼志え想へ不孝と
今がい大きふ後悔をうすすまう想ひよ有れて

何様の振抜く姿の出来事のみか圍うちを寧て將でも
りて、縦ひ八十石二十石の故の出来事より頃入る
あざれ娘ばかりとまゆ懐ひませんト嘆息」の聲もとも
船の籍が出来たつとく女房がね出をふぞおもを房へ
躰て娘立よ形り食後みひ又限清ふ乃び時を病一と
ありじとぞ

正史 いろは文庫 卷之五十三

